

ほんとうに一文にもならなくても、**知識は「人生の収穫」**だとしみじみ思える。飼ってもいない犬の躰けに関するテレビを見て、犬の種類を少し知るだけで、或る日こんなふうにに退屈ということを知らない時間も過ごせるようになるのだ。

「人生の収穫」と言えるものを得るためには、多くの場合（すべての場合とは言わないが）世間の常識にいささか刃向かって、**自分独自の価値観を持った方がよさそう**だ。それが庶民の暮らしの中で到達しうるささやかな自由の境地なのである。

私は本質的にどこかいい加減なところがあり、自分の名前についても、厳密に考えたことがない。何しろ本名は別なのでペンネームなど記号と思っているのである。「ソノさんは曾野さんですか、曾野さんですか、どっちを書いたらいいんですか？」と聞かれると、つい「どちらでも」と言ってしまふ。どっちを書いても多分読者は私のことだとわかるだろう。

しかしそれだけに、襟を正して厳密さを肝に銘じようとしたことはある。それは連載小説を書く場合の心得だ。読者が毎日読んでいて**筋を知っていてくれるだろう、と思うのは甘い**。だから毎日、最初の一、二行で登場人物が男か女か、年寄りか若者かくらいはわかるような工夫をしなければならない。本にまとめる時は、そうした説明部分をまた丹念に除去する作業をするのである。

私が料理が好きだ、と言うと皆疑わしそうな顔をする。若い時の私は、本当にサラダを作るのに一時間かかった、という逸話があるほど手が遅かった。それが中年過ぎてから突然、どうして素早く料理ができるようになったのかわからない。

私の家では一時期、大勢のお客様が絶えず出入りする状態が続いたので、私は誰がいっいらしても何か召し上がるものがあるようにしておきたい、そして（大きな声では言えないのだが）それをどうしたらあまり手をかけないでできるか、工夫することにもまた楽しみを覚えるようになった。

「舞踏会の手帖」という往年の名画は自分にダンスを申し込んだ青年たちのその彼の運命を迫っていく話だった。私にダンスを申し込んでくれた人は一人もいなかったけれど、**ひそかな信頼を残し続けながら知己であることを実利的に使わなければ、いつまでも温かい人脈は続くような気がする**。

どうしてそんなに国家主席や総書記に会いたがるのだろうか。現在の中国が、めざましい個人的企業の発達段階にあるなら、日本の経営者たちは、実力のある個人企業家や新しく台頭して来た資本家にこそ会うべきで、国家要人などに会っていたら、彼らの、公私さまざま多岐にわたる**利益誘導の計画に組み込まれる**だけだろう。

たとえば「心豊かな人間を目指す」というような文章に出くわすと、息が苦しくなっている。トカゲのような無感動な人も確かに困るのだろうが、自分は心豊かだ、と思っている人も同じように困るのである。人のことを思いやろうとしても、とかく利己主義に陥るのが人間というものだ。心というものの恐ろしさや複雑さを考える人は、決して「**心豊か**」などという表現を使えないだろう、と思う。

「適切な処置を講じる」という表現にも、はたと戸惑う。自分は確かに適切と思ってやるのだろうが、「適切」は万人には通用しない。必ず相手から見ると「適切」ではなく、偏ったり抜けたりしているものだ。こうした宿命的な誤差を恐れなくて、「**適切**」とい

うものがあり得る、と考える自信に会うと私はひるんでしまう。

「公正な評価」という言葉も安心して読めない。公正な評価ということは、ほとんど宿命的に不可能なものなのである。

もっとも男にもほとんど勇気のない人はざらにいて、暑いから（寒いから）、汚いから、病気が蔓延しているから、政治情勢が危ないから、遠いから、酒が飲めないから、食べ物が口に合わないから、医療設備が悪いから、などあらゆる理由で、安全な日本にだけいたがる人が多い。

私の実感によると、人生の面白さは、そのために払った犠牲や危険と、かなり正確に比例している。冒険しないで面白い人生はない、と言ってもいい。

私はすべての生活は苛酷だと思っている。そのあって当然の苛酷を正視し、**苛酷に耐えるのが人生だと、一度認識すれば、すべてのことが楽になる**。感謝も溢れる。人も助けようと思う。自分の人生を他人と比べなくなる。

今度の事件で、この「きりしま」は、二〇〇一年一月二十二日午前二時に出動の指令を受けて現場に向かった。緊張の時間が過ぎて、現場離脱の許可を受け、鹿児島湾に帰港したのが二十四日午前九時だというから、丸二日以上ほとんど寝ずに行動しその間に銃撃も受けたのである。しかしすべて任務なのだ、と誰もが自覚していただろう。

私が印象深かったのは、堤船長の手紙の中の一節であった。

『やらなければならないことは、なるべく普通にやれる男たち』を目指して精進して参ります』

という言葉である。

一九九六年の五月十二日、「看護の口」の午前十時半頃、私はひどい転び方をして骨折をした。骨が硬かったのはいいのだが、右足の骨の一本を縦割り、一本を横割り、踵の骨が脱臼して、**足の向きが変わっていた**。当然私は救急車で運ばれて、すぐ脱臼した骨はストーンと入れてもらったのだが、レントゲンの結果「手術は仕方がないでしょう」という診断だった。

その日午後早々に、私は看護師さんたちに講演をしなければならなかった。私は診断がついた以上、そのまま会場に行き、電話で車椅子を借りることをお願いしておいて、無事に講演を済ませた。事故後約五時間ほど、私はまあ普通に仕事をしたのである。

・・・

どうして私が骨折後、全く痛みもなく講演ができたのかと言うと、私の脳の中にエンドルフィンとやら麻酔の効果のある物質が大量に出た、のだそうである。一方、私の生理は「これはかなりの大怪我だ」とわかっていたので、**血圧はうんと下がってしまった**のだろう。自己防衛本能というものは、実にすさまじいものがある。とにかく自分で麻酔薬と同じ物質を出して痛みを止めるのだ。